

として専らその宗教的意義の究明に、第二、資料を

一、刀劍

二、鎧、長刀

三、弓、鐵砲

四、甲冑

なる四章に分つて、奉納品自體の精密なる調査の報告に當てられた事は、同氏の調査方針が全く右の二方面にその重點を置く事を示すものに他ならない。

而して著者はその總説一、西圓堂と奉納品 に於て、西圓堂本尊藥師如來が、平安朝時代以後の本邦藥師信仰と結び付く事によつて法隆寺内に於ける民間信仰の中心となつた事情を、更に二、西圓堂奉納の武器 に於ては、その紀年銘に依つて奉納品の年代的考證をなし、それらが主として戰國時代を中心として奉獻されてゐる事を究め、更に三、奉納の意義と特質 に於ては、本來衆病退散、現世安穩」の利験を主とした藥師如來の信仰に對して武器の奉納は一見奇異に見ゆるも、その祈願の意趣は、この堂に於ては「武運長久」に存するのではなくしてやはり「病平安、子孫繁榮、如意満足」にあつた事を證し、それは武器自體が元來有する諸悪退散の觀念と、捨身の思想が藥師如來本來の利験と結び付く所より來るものである事を説いてゐる。而も現在この堂に傳へらるゝ奉納品は建長元年再建以後のものであり、武器に對する深い信頼を有した戰國時代を中心とする上からも、それは當然であるとしてゐる。

勿論以上に於て宗教的意義の上から西圓堂藥師如來と奉納武器の關係がすべて究明し盡されたとは考へられない。本堂が藥師信仰の勃興に伴つて如何にして特に一般民衆の支持を得るに至つたかの問題、又戰國時代を中心とする現在傳存せる武器が奉納されし時代の事はともかく、それ以前に於ける西圓堂の藥師如來に對する民間の信仰は如何なるものであつたか等に就いては未だ考究の餘地はあると考へる。しかし乍ら奉納武器自體の調査のみを事とせず、かゝる歴史的立場に立つ解釋を本書の最初に於てなした事は、次の資料の研究の價値を更に大ならしめたものであると言はなければならぬ。第二、資料 に於ける奉納品自體に就いての研究は今一々紹介するの煩を避けるが、本堂が我國武器沿革史上に占むる位置が他に類例の少い程重要であるだけに、それだけ著者の努力と炯眼に依る所多きこの報告書の價値は大であらう。尙宇野傳三博士の鐵組織の顯微鏡寫眞を加へる事により科學的研究の上にも完全を期して居る事は更に本書を權威付けるものであり、その學的價値は甚大であらう。(四六倍版、本文八五頁、圖版四七、日本古文化研究所發行)(清原宣雄)

Monumenta Nipponica

—Studies on Japanese Culture, Past and Present.—

Vol. I, No. 1 & 2, 1938

上智大學編

サブ・タイトルを示す如く『過去及現在に於ける日本文化の研究』に關し英・獨・佛等の語を以て書かれた論文を輯録して、今春上智大學から創刊號が出版された此の *seminal* の雜誌は、去る八月を以て第二號を重ねるに到つた。

主幹 Johannes B. Kraus 博士が發刊の辭に於いて述べてあるところに據れば、本誌は二つの目的を有つて生れてゐる。一には歐米の讀書界に東亞文化の形貌を、特に日本的なもの、特質に重點を置きつゝ紹介することであり、一つには此の年二度の機會に於いて東西學者の融合を謀り、斯の領域に於ける彼等の研究の協働を媒介せんとするものであると。そして斯様な文化交流の市場を創造することは、『日・歐の教授が協力して日本の若人の教育に當つてゐる唯一の學府としての上智大學』に於いてこそ最も可能であると誇稱してゐるのである。

本誌の執筆には、日本の大家も交つて居るが、大部分は日本研究に携はる外人學者から成り立つてゐる。第一號では世阿彌元清の能『滿仲』に就いて述べた Karl Florenz 博士の論、日本の詩歌のテクニクを取り扱つた Georges Bonneau 博士、日本の祈願繪として生駒寶山寺の繪馬を觀察した D. C. Holton 氏のもの等、劇、文學、或は民俗方面の研究が眼を惹いて、西洋人の日本理解に探り容れられる文化の面を映出してゐる。また第二號に於いて現はれた Hermann Bohner 博士の『花園天皇誠太子書』の研究、Heinrich Dumoulin 博士の明治維新の精神的根源理解の扶けとしての吉田松陰研究、及び同氏の日本の神道研究に對する見解

の發表等は、また近時に於ける興味之趣向を示してゐるものと云ふことが出来る。

併し乍ら本誌の最大の特色は、東西交渉史及び切支丹宗門史に對する特殊な關心である。日本近世初期に於ける歐洲諸國との外交關係の發展、訪日使節の航程に關する研究、或は切支丹宗徒の迫害及び殉教を繞る諸種の問題等は、全卷の半ばを蓋つてゐる有様である。

是と伴に第二の特色とも謂ふべきものは、史料典籍の外國語譯に充分な顧慮を拂ひ、オリヂナルな研究報告と相併んで是に廣い頁を割いてゐることである。第一號には唐の圭峰宗密の『華嚴原人論』が Dumoulin 氏に依つて獨譯され、また我が幕末時代全國に流布した民間の祕密宗教である如來教の珍らしい祈禱式が同氏及び石橋智信教授に依り初めて公けにされてゐる。其他 Winifrid Willehoise 氏の『雨月物語』は次號まで連載して、白峯淺茅が宿・登福論等の英譯を試みてゐる。第二號に於いては Alfred Bohner 氏による切支丹の傳道書『天地始りの事』の獨譯や、また日本最初の基督教護教書として慶長十年に著はされた『妙旨問答』の Pierre Imbertschude 氏に依る佛譯を観ることが出来る。斯様な史料の提供は、本誌の特色とする切支丹研究の部門に於いて當然最も力を注がるべきであつて、今後毎號に互つて、イエス・フランチェスコ・ドメニコ等、基督教の重要な諸教團の寶庫に藏せられた稀觀の文書・記録の公開を敢行すべきことが宣せられてゐる。それはかゝる根本的史料に基礎づけられた "purely scientific" な性

格の學問研究にしてこそ眞に特別の保護と激勵を享くるに値するものであるとする編述者の堅い主張より來てゐるのである。

外人に依る日本研究も既に前世紀までの見録・紀行・日本誌類の域を遠く去つて、今や邦人と對等の位置に於いて日本文化の特質を論究しつゝある。かゝるとき本誌の如き確固たる意圖と方針を有する學術雜誌の出版は、吾々日本人のためにも、刻下の現實的課題である日本民族の特殊性や、その文化の獨創性の問題に對して、極めて示唆に富む解答を提出するものとして注目せられるのである。(東京市麹町區紀尾井町七、上智大學發行。各冊三〇〇頁内外、定價五・〇〇)(稻葉慶信)

日支交通の研究中近世

藤田元春著

何よりも歴史地理學者であり又支那に關して深い造詣を持たれる著者がこの好題目をとらへ來つたことは寧ろ當然のことであるとはいへ、この一篇の勞作は常々これらの問題に心をとめてゐる我々にとつてはこよなく愉しい訪れでもある。

章を分つこと十一、元明時代の交通の概説に初まり、シラの島とゴールの問題を論じ、薩摩人の南海に於る活躍を叙して琉球と南越の日支交通に於る意味を明かにし、更に室町時代の遣明使等の入唐記を研究して當時の交通路と貿易の實際を語り併せて明人の日本に關する地理的知識を述べ、續つて元和航海記を今日の地理に對照して我國人の正確な海路知識を語り、石橋博士所藏の

世界圖及びその類本が又當時の海圖を原本とするものと推し、續いて暹羅國風土軍記中の暹羅國行程及び青木昆陽の續草廬雜談に見ゆる海路等を考證して再び我國人の南洋航海知識を説き、近世大船建造の禁以後も尙かゝる雄圖と航海知識の存したことを水戸光圀の所謂蝦夷探險船について立證し、最後に日本海に於る造船の發達を古代より説き來り、又船用羅針盤の我國人によつて先鞭をつけられた事實を明かにして日本の航海術の爲に虹のやうな氣焔を吐いて全篇を閉ぢる。讀過すれば主題は主題を呼び各章互に相應して宛も讀者をして南海の潮騒をまのあたりに聴く想ひあらしめるであらう。殊に著者の發拔なる卓見を見るべきはゴールス問題に就いての一章であらうか。あの浪漫的なゴールスのふるざとは、一五五四年のモヒトの印度洋圖、或はゲオルギオの報告に基く一五八四年版のオルテリウスの日本圖に現れたゴールの地名を薩南郡に比定することによつて、我が南薩薩摩に求められたのである。蓋し古地圖に於る考證は著者の獨壇場ともいふべく、その天馬空を行く推論と共に、常にこの一章に止まらず本書の全體に互つて突々たる光彩を放たしめてゐる。

然しながらこのやうな中世以降の南海に於る我國人の戰鬪的な或は平和的な活動は、どのやうな構造を持ち、いかなる人々によつて負はれてゐたのであらうか。著者がメンデス・ピントの *Nauticum* に當てた堺の納屋貸衆の如きはこのやうな問題に立入るとぐちとして甚だ興味あるものであるし、その外にも同様な示唆的なものが散見するにも拘らず、それ等がまだ著者の明快な